

子供がうれしい

応答性



3歳児4月 入園後1日目

入園後1日目(3歳児・4月第1周)の保育室。子供たちが初めての園生活をスタートさせる日。泣きながら母親から離れた子、ドキドキ緊張しながら保育室に入ってきた子、子供も親も先生も、どこかそわそわ。担任の先生は、自身の保育経験をふまえ、玩具類を分かりやすくコーナーごとに分け、準備した。上画像の「ぬり絵コーナー」もその一つだった。

ぬり絵で遊び出したB子たちに、A先生は予め準備していたお面帯(紙を輪状にしたもの)を提案した。初めは喜んでお面を被った子もいたが、すぐに頭から外し、床に置き捨てる子供たち。「あれ?去年の3歳児は喜んでウサギやネコになりきって遊び出したのに...」と困惑気味のA先生。するとB子が「○○ちゃん」と呟いた。○○ちゃんとは、どうやら自宅で飼っているネコのことらしい。

保育者のこころ

入園当初、子供たちは大なり小なり不安定な心もちで登園してきます。保育者(以下「A先生」)は「この時期はまだ園や保育室、先生など、新しい環境に慣れることが第一」と判断し、敢えて玩具類(ブロック、ましごとセツト、ぬり絵)を準備し、初日、子供たちを迎えました。所謂玩具は、遊び方(使い方)が限定的です。例えば、ブロックを定れば大抵の子供は繋げながら遊びますし、既成のままごとセツトがあればおままごとを始めます。ぬり絵とクレヨンがあれば、多くの子はぬり絵を遊ぶでしょう。つまり子供は遊ぶ

ていますが、見方を変えれば「遊び方の決まった玩具類が、子供(私)と遊んでくれる状況」とも言えるのです。知育玩具も例外ではありません。しかし、A先生が言うにはこれは意図した状況とこのことでした。なぜならこの週は、どんなことでもいいから楽しんで遊ぶを自分で遊ぶ遊びながら心を安定させていく、兔に角つけ遊びをすることを主眼に置いていた、苑と園のことです。従って、見慣れていて使い方が分かり易い等の理由で、初めだけ玩具類を置くこととした。同時に大切なのは、今日から始める「個々への丁寧な応答です」、A先生は「ぬり絵」に寄り添い、応答的に関わりをする保育者の働きかけについては、常に職員間で話題に出すようにしています。このこと。応答とは、言葉でのやり取りだけを指すのではなく、言葉でなく、言葉の例にとれば、子供の興味の高まりに応じて、遊び方が限定的な玩具類を次第に減らしていく等の環境の再構成が、非常に重要な援助となってくるのです。

玩具は時と場合に応じて

ちよこことメモ
環境の応答性については、3要領・指針解説でも触れられています。例えば、保育所保育指針解説においては、「子供が環境との相互作用を通して成長・発達していくことを理解し、豊かで応答性のある環境にしてい

くことが重要である。ここである。幼稚園教育要領解説においては、「発達を促すため

いうことが重要である。ここである。幼稚園教育要領解説においては、「発達を促すため

ネコとウサギのお散歩に行ってみーす!
B子
ぼくもやりたい!

赤いリボン
ドリンク剤の空き箱にぬり絵を貼り付けると、「リボンを付けたい!」とB子。
ホームページでは、写真を一部割愛して掲載しています。

A先生が、「お散歩する?」と尋ねると、うん、とB子。一緒に空き箱を選び、ネコの顔(ぬり絵)とビニール紐をそれに貼り付けると、B子は、にやっと微笑んだ。すぐにB子は「ネコ(○○ちゃん)」を床に置くと、優しく紐を引き、歩き出した。その様子に、私もしたいと、次々に訴えてくる子供たち。A先生は、倉庫に蓄えていた空き箱を出しながら「まさか初日からこの箱を出すことになるとは...」と少し驚いていた。でもそれ以上に、子供たちがぐいぐいと自分の思いを表出している状況がたまらなく嬉しくて、自分の心もわくわくと躍っていることに、気がついた。やがて、他の子も自分で選んだ空き箱にぬり絵を貼り付け、保育室のあちこちで、お散歩が始まる。自分の動物(ペット)の動きを見ながら後ろ向きで散歩する子、そこら中に転がっている道具(積み木等)をうまくよけながら歩くことを楽しむ子、友達と動物を並べて歩く子、友達を追ったり友達から追われたりする子...、きゃっきゃと喜びながら、ぐるぐる、ぐるぐる。子供たちはこの日、お散歩ごっこで、ここに顔になった。

柔軟に変化し、幼児の興味や関心に
応じて必要な刺激が得られるような
応答性のある環境が必要である。一
と示しています。
本事例から見ると、応答性のある
環境とは何でしょうか。遊びの状況
や雰囲気、子供個々の内面の動きへ
の寄り添いから生まれた「A先生の
子供への振る舞いは、まさに応答
的に関わりと云えるでしょう。また
別々に遊んでいるように見えても影
響し合い、周囲で起きている状況
を互いに感じたり真似したりと、時
と空間を共有している子供同士も、
応答的な関係性が形成されています。
加えて言えば、一人一人へ向けたA
先生の受容的な姿勢が、子供同士の
応答性を支えているのでしょうか。
応答性とはどうでしょうか。例え
ばぬり絵。結果的には、この遊びの
きっかけとなりましたが、決して応
答性豊かなものとは言いきれません
やはり、ぬり絵はぬり絵として子供
を遊びに誘っている要素が強いため
子供の方からの動きかけに依りた
変化と言え、しにくい部類となり
ます。しかし本事例では、子供の働
きかけ(ぬり絵のお面を放棄する、
B子の呟き「思い」)に対してA先生
が応答的に丁寧な仲介し、何にでも
なり得る応答性豊かな箱や紐を提案
したことにより、ぬり絵本体もB
子のやりたいことのイメージにうま
く溶け込んでいったと言えるでしょ
う。つまり、ぬり絵に限らず、遊び
方が限定的な玩具類は、応答性豊か
である、とはいえず、環境として置
く場合、それ相応の意図が明確でな
ければ、子供の創造性を狭めてしま
うものになるのです。逆に、応答性
が潜在的に豊かなものにはどんなも
のがあるのでしょうか。例えば水や砂
自然物等、それ以外にも様々な身辺
材や道具が思い浮かぶことではな
いでしょうか。園内や小学校の先生たちと
語り合う機会があってもよいのでは
ないでしょうか。